

シンポジウム

御嶽山の価値と未来

日本自然保護協会(NACS-J)

日時：2022年6月18日(土)13:00~16:00

主催：木曾町、王滝村、(公財)日本自然保護協会(NACS-J)

後援：環境省 信越自然環境事務所、長野県、岐阜県、高山市、下呂市、
木曾町教育委員会

場所：木曾町立開田中学校体育館

プログラム

- 1) 開会 (司会進行：志村智子 NACS-J 事務局長) 【13:00】
主催挨拶：亀山 章 (NACS-J 理事長)・原 久仁男 (木曾町長)
来賓挨拶：國島 芳明 (高山市長)
- 2) 基調講演 【13:15】
中山 郁 (皇學館大学教授)「日本の山岳信仰と御嶽の宗教文化」

(休憩)
- 3) パネルディスカッション (進行：大野正人・NACS-J 保護・教育部長)
①話題提供 【14:15】
熊倉 基之 (環境省自然環境局国立公園課長)
「国立・国定公園の今後の役割と発展」

稲垣 康 (木曾町環境協議会住民運動部会長)
「木曾町開田高原における保全活動の取り組み」

小野木 三郎 (飛騨高山ふるさとを歩こう会会長)
「御嶽山の価値と自然保護の課題」

②ディスカッションテーマ 【15:05】
「御嶽山の国立・国定公園への昇格に向けて」
- 4) 閉会 【15:50】
挨拶：亀山 章 (NACS-J 理事長)・腰原 道廣 (王滝村長)

開催にあたって

長野県と岐阜県にまたがる御嶽山は、古くから信仰を集めた霊山として知られ、日本有数の火山であり、高山植物やライチョウが生息する自然環境の価値を有しています。一方で、過去には大規模なスキー場開設など数多くのリゾート開発が行われ、自然が改変されてきました。また1979年と2014年に大規模な噴火をして火山災害をもたらしてきました。

御嶽山は長野県と岐阜県の両県では、ともに県立自然公園に指定されておりますが、標高3,000m以上の名山が国立・国定公園でないのは御嶽山だけです。また、御嶽山の安全な利用のためには、噴火の際のシェルター(避難所)の設置など、国による施設の整備も必要です。これらのことから、御嶽山の国立・国定公園に向けたシンポジウムを開催します。

我が国では、2022年に開催される生物多様性条約締約国会議(CBD/COP15)で決定される次期世界目標として「30 by 30」(サーティ・バイ・サーティ、2030年までに陸域・海域の30%を保全・保護地域とすることを目指す目標)が検討されており、日本国内の自然保護区の拡大は喫緊の課題となっています。

本シンポジウムは、御嶽山の価値を見つめ直し、自然公園として保護と利用のあり方を議論し、御嶽山の国立・国定公園化の実現への機運を醸成していきます。

基調講演者

中山 郁 なかやま かおる (皇學館大学教授、宗教学)

昭和42年東京に誕生。國學院大學大学院博士課程後期満期退学(博士(宗教学))。著書に『修験と神道のあいだ—木曾御嶽信仰の近世・近代』(弘文堂、平成19年)、共著に『木曾のおんたけさん その歴史と信仰』(岩田書院、平成21年)がある。また、栃木県護国神社権禰宜でもある。



話題提供者

熊倉 基之 くまくら もとゆき (環境省自然環境局国立公園課長)

平成6年早大政経卒。環境庁(当時)に入庁し、滋賀県での自然保護、本省での環境アセスメント、地球温暖化対策、放射性物質汚染対策等の担当課室長を経て、令和元年7月より現職。東京都出身。



稲垣 康 いながき こう (木曾町環境協議会住民運動部会長)

高校まで開田高原で過ごす。日本大学農獣医学部卒業。東京の環境調査会社に就職。アセスメント、河川水辺の国勢調査等に携わる。帰省後測量会社に就職。退職後役場の臨時職員となる。木曾町環境協議会の設立に関わり住民運動部会長を務めている。県の希少野生動物保護監視員としてチャマダラセセリの保護を行っている。



小野木 三郎 おのぎ さぶろう (飛騨高山ふるさとを歩こう会会長)

1939年岐阜県各務原市生まれ。高校時代に植物探索で山登りを始め、大学の卒論では御嶽山の植生調査に取り組む。小中学校教諭、岐阜県立博物館学芸員、高山短期大学飛騨自然博物館学芸員兼講師を歴任。「自然保護」の基盤づくりを目指し、自然観察会運動に情熱を傾ける。飛騨高山ふるさとを歩こう会代表、乗鞍岳と飛騨の自然を考える会副会長。





「日本の山岳信仰と御嶽の宗教文化」

中山 郁（皇學館大学文学部神道学科）

1: 日本人の自然観と山岳観—生命の根源としての山中他界—

・山とはどのような世界？

- ① 水や動植物を生み、育む→ **豊饒な「生」の世界**
= 神々が鎮まる清浄な世界、生命が生み出される「母の胎内」
 - ② 死者の魂が還ってゆく→ **「死」の世界**
= 死霊と祖霊(カミ)がおもむき、鎮まる世界～人の生と死に密着した存在～
- ★山とは、現世の延長上にある、この世とは異なる、生と死の根源となる世界 ～山中他界観～

2: 修験道から御嶽信仰へ—御嶽講の活動と宗教文化的意義—

・日本の山岳信仰の流れ

- ① 古代⇒ 人は神の鎮る山に入れぬ…神の清浄性を守るため
- ② 奈良・平安期⇒ 僧侶や民間修行者が修行の場を求め入山
山岳寺院の成立と神仏習合の始まり
- ③ 中世⇒ 金峰山(奈良県) 熊野(和歌山県)を始めとする霊山

信仰の展開 —山伏の宗教「修験道」の成立—

・修験道の特徴

- A) 激しい山岳修行による超自然的な力能の獲得と人々の救済
- B) 山の神を「仏」として崇拝・祭祀(山の神の祀り手)
- C) 宗教の専門家(プロ)

・修験道の山岳観念

- ・山とその自然=神仏が自然として顕現したもの
すべてのものに魂が宿る
山のカタチ、森の音、鳥の声、川のせせらぎ=神仏の教え
～山の頂を踏むこと=山頂に鎮まる神仏との一体化を象徴～
- ・なぜ山に入り修行するの？
→ 神(仏)と一体化し、祭祀を行ったり人々を救済するため。どのように一体化するの？
→ 「疑死再生の行」
古い自身の死→修行による神仏との一体化→新しい自身の誕生
=神仏の力の獲得(疑死再生の修行)

★生命力の源である山でのよみがえりの信仰が基盤！

御嶽信仰の展開

- ・江戸期における御嶽信仰の展開
 - ・近世中盤まで→ 100日の重潔齋を経た「道者」のみに許された登拝
 - ・天明5年(1785) 覚明行者、軽精進登山の強行
→ 一般信者への登山開放へ
 - ・寛政4年(1792) 江戸の修験者、本明院普寛による王滝口登山道開山、御嶽講の結成と講中登山の展開
関東→ 普寛講・一心講・一山講
中部→ 覚明講(心願・明栄講など)
- ★御嶽講展開の原動力
- 修験由来の神がかり技法「御座」の存在
 - 庶民(アマチュア)主体の講活動と布教
 - 木曾谷の人々、尾張藩による庇護
 - ・明治15年(1870) 教派神道一派、御嶽教成立

3: 御嶽信仰の宗教文化的価値

3-1 山岳宗教が今も生きづく山

・霊山信仰の根幹=「山岳修行」の存在【理由】

- ① 霊山の祭祀と信仰の基盤として
 - ② 信仰の後継者育成の機会として
 - ③ 山をめぐる観念が保存される場として
- ・日本の山岳宗教→実は生きた霊山信仰が残る山は多くない

本格的な霊山信仰が残る山

出羽三山(山形県)、八海山(新潟県)、大峰山(奈良県)、石鎚山(愛媛県)など

～生きた山岳登拝・山岳修行が行われる場～

・山岳信仰の「文化財」としての価値見直し

世界遺産としての紀伊山地や富士山など
「文化財」「文化遺産」というラベリングの有効性と限界

～生きた信仰でないから「文化財」として保存?～

・今も息づく御嶽信仰

- 関東・中部地方を中心に御嶽講が広範に展開
- 御嶽講による夏、冬の登拝の実践
- 御嶽山中や講での多様な修行の実践
- 山に人の魂が帰るといふ山中他界観の明確な現存(霊神碑)

～富士山より遥かに大規模で、大峰山・出羽三山などの修験霊場に劣らぬ生きた信仰が「現存」する貴重な世界～

3-2 シャーマニズムと修行の文化

- ・シャーマニズム→神がかりにより神仏や精霊等の崇拜対象と交流し、祈祷・治療・占い等を行う宗教者（シャーマン）を中心とする宗教。日本では青森県のイタコや沖縄のユタがメディアを通じて知られている。
- ・御嶽信仰の中核＝シャーマニズム
- 「御座」儀礼の実践（前座・中座・四天、一人伺等）
- 神がかりを中心とした信仰者集団（講・教会）の存在
- 御座実践のための激しい修行の文化の存在
- ※滝行・穀断ち、断食、籠山修行、はだし行、手護摩などなど
- 山に鎮まる信仰者の霊魂との交流・供養の文化（霊神信仰）
- ～ほんの少し前まで、日本で最も神がかりを目にできた山！～
- ★神がかり＝御嶽山に祀られた神々、霊神との交流
- 自然と人とが交流する文化が現存！**

3-3 信仰・観光を介したホストとゲストの関係性

- ・覚明行者没後の軽精進登山の認可
- 寛政3年（1791）地域の振興にもつながるとの理由
- ・御嶽開山と普寛行者のプラン
- 「御嶽山を開けば講の信者がたくさん来るから地元の人々も豊かになってゆく」（『普寛行者道中日記』）
- ～王滝口開山事業に対する協力を呼び掛けるロジックとして神がかりの託宣という形で地域に支援を要請～
- ・御嶽講の地域への影響
- 宿泊施設（旅館・山小屋）・霊神碑建立（石屋）・「百草」の販売・夏の山仕事・中山道中の各宿場の繁盛
- ・黒沢口・王滝口の登山道争い…山役銭による収入が課題
- 順明、盛心など御嶽行者による調停
- ～普寛講は王滝口から、覚明講は黒沢口から、一心講は王滝口から入山し黒沢口に下山～
- ・地域社会による御嶽講の保護

- ・文政3年（1820）幕府による御嶽講（一心講）の取り締まり
- ・柴崎仙左衛門（盛心行者）による信仰継続の努力と木曾福島宿場役人、児野嘉左衛門の協力
- ・尾張藩と山村代官による庇護、「護摩堂」の建立による組織化の動き
- ～木曾谷の経済振興のため御嶽講を重視～
- ★江戸時代における「インバウンド」！！



おわりに～御嶽信仰に見られる自然と人の関係～

- ① 人が山に合わせるということ～清浄な世界の尊重～
百日の重潔斎・軽精進による登山・開山時期の設定・八合目で草鞋を変える・トイレは神を敷く・草木は切らない・ゴミは捨てない…「山に入らせて頂く」思想
 - ② 人と山の自然の交流～山岳宗教の思想とシャーマニズム文化～
御座による神がかり、修行を通じた神（自然）との合一
人は自然の意志を聞き、一体となることができる
 - ③ 山の自然を介した地域社会の振興～近世のインバウンド～
御嶽山の自然の保護・尊重という共通の土俵上でのホスト・ゲストの関係性の構築のありかた…が、かつてはあった…
- #### 今後の考え方としては？
- ・これからの山岳と文化との向かい合い方
 - A) 「自然保護」→これは最大限に重要！
～同時に、この「自然」には、自然と共に生きる「人」も入るのでは？～
 - B) これから保護すべきものは何か？
～「自然」+山で暮らし、信仰してきた人々の営みの在り方の保全（正の遺産・負の遺産ともども）～
 - C) 自然と人の関係性の理解を踏まえた、自然科学・人文科学的知見を踏まえた「自然保護」の考えの必要性
～今後の「保護」と「生活」のために～

お問合せ先

〒104-0033 東京都中央区新川 1-16-10 ミトヨビル 2F （公財）日本自然保護協会 保護・教育部
電話：03-3553-4101 メール：hogo@nacsj.or.jp